

令和 2 年 5 月 26 日現在

機関番号：34512

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02477

研究課題名(和文) 1910～30年代イギリスにおける音楽劇の発展過程に関する研究

研究課題名(英文) Popular Musical Theatre in Britain and Its Transitional Period, 1910s to 1930s

研究代表者

赤井 朋子 (Akai, Tomoko)

神戸薬科大学・薬学部・准教授

研究者番号：70309433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：1910～30年代のロンドンにおいては、ミュージカルに先立つ様々な演劇や芸能(ヴァラエティ、レビュー、オペレッタなど)が上演されていたが、それらのジャンルは当時、ロンドンに限らず、欧米の主要な都市や日本国内においても、同様に流行していた。本研究は、ロンドンにおけるその種の演劇(特にレビュー)が、外国の演劇文化を移入し国際化していく過程において、どのように国民的性格を持つものへと変化していったのかを明らかにするものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、この時代の日本における同種の演劇も研究・調査の対象としたが、そうすることにより、イギリス演劇に限定しない、国境やジャンルを超えた広い視点の元に新しい成果を提供することができた。また、日本文化に影響を与えてきたものとしてとらえられることの多い西洋文化も、同じように外国文化の影響を受けながら独自の変化を遂げてきたことを、イギリスのポピュラー音楽劇の発展過程の中からいくらかでも見いだすことができたのは有意義であった。

研究成果の概要(英文)：Between the 1910s and the 1930s, the period before the golden age of American musicals, there were a number of popular forms of musical theatre performed in West End theatres in London. These included varieties, revues, and operetta. These genres were very popular not only in London but also in other major Western capitals and even in Japan. This study examines how the performances of those types of theatre especially musical revues contributed to the shaping of national identities through the influence of elements and ideas from other nations.

研究分野：人文学、イギリス演劇

キーワード：演劇史 近代イギリス演劇 国際化 国際移動 英国性 ノエル・カワード

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

イギリスにおけるこの時代(1910~30年代)は、伝統的に戯曲不作の時代と言われ、戯曲を重視する立場からは長らく等閑に付されてきた。しかし、戯曲より上演の方が多く研究されるようになってきた今日においてはこの時代の演劇も再評価されるようになり、特にミュージカルの先行芸能であるオペレッタやレビュー、ミュージカル・コメディやヴァラエティといったジャンルの演劇が新たに注目されるようになってきている。例えば、Len Platt and Tobias Becker (eds.), *Popular Musical Theatre in London and Berlin: 1890 to 1939* (Cambridge UP, 2014) は、2つの国際都市ロンドンとベルリンに焦点をあてたその種のジャンルの研究書である。

日本国内においても、それと同じ時期を含む明治期から昭和初期までの、これまであまり論じられてこなかった演劇領域が研究されるようになってきている。例えば、2014年に刊行が始まった<近現代日本演劇の記憶と文化>シリーズ(森話社)は、新劇や前衛演劇と歌舞伎のような伝統芸能の間の複合領域や中間領域(例えば浅草オペラや宝塚少女歌劇団など)を総合的に扱っている。本研究課題の背景には、国内・国外のこのような研究動向があった。

研究代表者は2009~2011年度に採択された科研費課題において、イギリスのミュージカル・レビュー(歌、ダンス、スケッチからなる一種の音楽劇)をとりあげ、次の2点、つまり、1) ミュージック・ホールなどの大衆演芸の影響を受けながらも、いかにそれとの差別化をはかりながら、ウェストエンドの中産階級的なエンターテインメントに変質していったのか、2) フランスやアメリカから移入されたものでありながら、いかにイギリス的な特徴を持つレビューに変化していったのか、の2点を目的として研究を進めた。そして、ある程度の研究成果を上げることができたが、この時点ではまだレビューの研究に着手したばかりの導入的なものであったため、残された課題も多かった。

そこで、2012年度に採択された科研費課題においては、上の1)に重点を置き、レビューだけでなくヴァラエティにも範囲を広げて、ミュージック・ホールのような大衆的な「寄席」とストレート・プレイを上演する正規の「劇場」との関係から調査・研究を行なった。その結果、当時のロンドンには広い観客層を対象とする異種混交的な演劇文化が存在し、そこから都市の中間層を対象とした新しいジャンルの演劇・芸能が形成されていったことを一部明らかにした。研究代表者個人の学術的背景としては以上のことが指摘できる。2016年度に採択された本研究課題は、それまでの研究を継続して行うもので、具体的には上の2)に関するものである。

2. 研究の目的

イギリスのミュージカル・レビューを進化・発展させそのジャンルとしての確立に貢献したプロデューサーのチャールズ・B・コクランは、1925年にレビューに関するマニフェスト的な文章を書き残しており、「この融通のきく形式[レビュー形式]は、あらゆる種類の国際的な要素や技術、個性を吸収しながらも、はっきりとした国民的性格を維持するのである」と述べている(Charles B. Cochran, "Revue as an Art-Form," *The Fortnightly Review*, 1 Sept. 1925: 358)。そして、このエッセイを発表した1925年に、はじめて劇作家のノエル・カワードを台本作家に起用して『ダンスを続けて』というレビューをロンドンで上演し、ヒットさせている。

本研究においては、この1925年という年を基準にして、それ以前とそれ以後の時代に分け、国際性から英国性への変化の過程を調査分析することを目的とした。具体的には、この時代のレビューを中心としたいくつかの作品を選び、その上演記録を精査することにより、外国演劇のどの要素を受容しどの要素を排除していったのか、また、外国演劇と異なるどのような表現形式や表現内容を発展させていったのかを分析することを目的としていた。

一般的に戯曲不作の時代と言われるこの時代には、ヴァラエティやレビュー、ミュージカル・コメディのような音楽劇が数多く上演され、特に両大戦間期はレビューの黄金時代と呼ばれるほど多くのレビュー作品が生み出されたが、本研究においてその全てに目配りした包括的な調査を行うことは手に余る。したがって、一部の作家や興行主のものに限った選択的なものにはなるが、当時の代表的な上演のいくつかを時間軸に沿って比較対照することにより、上記の目的をある程度達成できると思われた。

また、この時期はロンドンやその他欧米の主要な都市だけでなく、日本においてもその種の演劇が流行していたので、1910年代に留学でイギリスに滞在していた日本の演劇人(特に坪内士行)がこの時代のイギリス演劇をどのように受容し、帰国後の演劇活動にどのように活用していったのかについての調査も合わせて行うことも目的とした。

3. 研究の方法

研究目的欄においても触れたように、1910~30年代を大まかに前半と後半の2つの時期に分け、それぞれの時期からミュージカル・レビューを中心とした代表的な作品をいくつか選択し、その上演記録など歴史的資料を調査した。そして、作品の題材や題材の扱い方、創作に関わった人たち(例えば、出演した俳優やパフォーマー)の国籍や彼らに対する評価等を当時の資料から拾い出すことにより、外国の演劇文化の中からどのようなものを移入し、どのようなものを排除していったのか、またどのような国民的性格を持つものが形成されていったのかを分析した。

4. 研究成果

1910年代~1920年代前半の時期については、この種の演劇の国際性に特に注意を向けながら

資料調査とその分析を行なった。チャールズ・B・コクランはレビューというジャンルを「あらゆる種類の国際的な要素や記述、個性を吸収する」ものと形容したが、実際にどのような国際的要素を含んでいたのかを特に国境を越えてグローバルに活躍していた外国の俳優やパフォーマーの演技を記録したものを収集することにより調査を行なった。そして、当時のレビューがあらゆる価値観の相互に作用し合うトランスナショナルな空間であったことをいくらかでも明らかにすることができた。

1920年代後半～30年代の時期については、この種の演劇に見られる英国性に特に注意を払いながら、資料調査と分析を行なった。1920年代はノエル・カワードやアイヴァー・ノヴェロウなど生粋のイギリス人がロンドンのポピュラー音楽劇の分野で活躍し始めた時期であると言われるが、彼らの発表した作品の上演情報を時系列に並べて比較することにより、外国の演劇文化の中からどのようなものを移入し、どのようなものを排除していったのか、また、どのような要素が国民的性格を持つものとして残っていったのかを検証した。そして、イングリッシュネスの問題と結びつけて考えられることの多いカワードのそのような特徴を彼のレビュー作品の中から読み取ることができた。

資料調査を実際に行ってみると、見当をつけていた資料に情報の乏しいことがわかったり、逆に隣接する別の項目に意義深い情報があることに気づいたりすることがある。

本研究においては、外国からイギリスへの文化の移動だけではなく、イギリスから国外への移動についても目を向けて、当時のロンドン演劇界のトランスナショナルな状況を多面的に明らかにすることも行なった。具体的には、1) 1910年代にイギリスに留学した日本の演劇人の帰国後における音楽劇の創作、2) 1920～30年代にノエル・カワードの作品がニューヨークで上演された時の受容の状況、を調査、分析した。そして上記の研究内容を、国内外の様々な学会や研究会において報告し、様々な立場の研究者と意見の交換を行うことができた。本研究は、イギリス演劇の研究のみならず、特定の国、特定のジャンルに限定されない演劇の研究にとっても、示唆的なものになると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Tomoko Akai
2. 発表標題 The Takarazuka Girls' Opera and the Urban-Rural Boundary
3. 学会等名 International Federation for Theatre Research World Congress, Shanghai (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 赤井 朋子
2. 発表標題 交差するまなざし - 外国（人）が見つけた日本、日本（人）が見つけた日本をめぐって（ワークショップ）
3. 学会等名 英米文化学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomoko Akai
2. 発表標題 Cultural Transfer between London and Takarazuka: Translation and Adaptation of Western Comedy in Late 1910s-1920s Japan
3. 学会等名 International Federation for Theatre Research World Congress, Belgrade (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 赤井 朋子
2. 発表標題 1910年代の英国演劇と坪内士行
3. 学会等名 英米文化学会比較文学分科会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 赤井 朋子
2. 発表標題 坪内士行の英国体験と宝塚少女歌劇
3. 学会等名 英米文化学会比較文学分科会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoko Akai
2. 発表標題 Cultural Transfer between London and Takarazuka: the Imitation and Adaptation of Musical Revue in 1920s Japan
3. 学会等名 Association for Asian Performance Conference, Las Vegas (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 森佳子他編、赤井朋子他11名分担執筆（赤井朋子「ノエル・カワードの『作詞作曲』（一九三二）試論 - 言葉と音楽によるレビュー」）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 未定
3. 書名 演劇と音楽	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考